日光保育

燃料が欠乏しても、日光のあたたかさがある。食糧が充分でなくても、日光の栄養作用がある。戦時幼児生活に、こんなもの貴重なものはない。勤勉な農夫が日光を尊重するければならぬ。これほど活用しなければ昔からもの。今日の増産において、それは誰でもあるが、今日の多忙において、が如何に強いことであろう。「いいお天気さま」は彼等の感謝に充ちた讃歌である。まめやかな主婦が日光を惜しむのは、誰でもあるが、今日の多忙において、そのかし一層のことであろう。「結構なおひよりは彼女等の喜びに充ちた讃語である。彼等も彼女がさぞ真剣なことはないといっていも日光の活用に今日ほど真剣なことを任としている保育するこれは論を俟たない。しかも、ろう。そのために自らまっ黒に日にやけている。

今日、日光活用に最も真剣な一人が、戦下の幼児生活を護り、強く逞しく保育することを任としている保母諸君でなければならぬことは論を俟たない。しかも、そのために必要な労力は極めて少ない。ただ窓を開けるばいいのである。一挙手一投足の労とはこのことであるという。ただ、愛する幼児に少しでも多く日光を与えたいという心の有り無しだけが問題になる。

（倉橋惣三選集　第四巻　戦中小編より）